

「流動比率 当座比率について」

資産	負債
	純資産

1回目の「貸借対照表について」で、
貸借対照表には会社の状態のヒントが隠れているということをお伝えしましたが、
今回は貸借対照表項目から計算する「流動比率・当座比率」について見ていきます。

突然、「流動比率・当座比率」と聞いても何のことかわからない方もいるかと思います。
簡単に説明すると、会社の「安全性」をみていく方法です。
具体的には企業の支払能力が高いか低いかが判断できる比率なのです。

この「安全性」が高いということは、企業の信用力にも関わってきます。
それは広い意味での「借金」(流動負債)がしっかり支払えるかどうかの判断ともいえるからです。

「流動比率」は
$$\text{流動比率} = \text{流動資産} \div \text{流動負債} \times 100\%$$

という計算式で求めていきます。

ここで流動資産、流動負債とは何か説明します。
流動資産とは短期に現金化できる資産で、
現金や受取手形、売掛金、在庫など大きく見ておおむね一年以内に現金化できるもの
です。
これに対して、
流動負債とはおおむね一年以内に支払の義務があるものと考えてください。

それではどのような企業が安全でしょうか。

下図の貸借対照表を見てください。

A社		B社		C社	
流動資産 600	流動負債 400	流動資産 600	流動負債 600	流動資産 400	流動負債 600

流動比率 150%

流動比率 100%

流動比率 67%

先程の計算式にあてはめるとそれぞれの企業の流動比率が求められます。

それではどの企業が「安全性」が良いといえるか。

おそらくA社、B社、C社を見比べるとお気づきになる方もいるかと思いますが、**A社**ということになります。

A社は、流動負債「借金」400を流動資産「現金など」で支払っても200残りますね。ここでは、広い意味での「借金」を支払えるかどうかを見るのですから、**流動資産が流動負債よりも多いほうが良い**のです。

したがって、その比率（流動比率）が高いということは良いということになります。

どのくらいの比率が良いのかといいますと、

流動比率は一般的に150%以上が望ましいといわれております。

では**B社**のような流動比率が100%場合はどういうことか。

簡単に言うと「借金」を支払ったら企業には資金が残らない状態ということになります。

C社は「借金」の全てを支払えない状態ということになります。

この比率を見ていくことによって、**資金的に余裕があるのかもわかる**のです。

流動比率が低い要因としては、次のことが考えられます。

1. 在庫、売掛金などが滞留してしまって、**資金確保のため短期的な借金が増加**している場合
2. 買掛金や支払手形などが増加して、資金調達の元手になってしまっている場合
3. 短期の借金で固定資産（土地や車、建物など）の投資を行った場合

このような場合には**売掛金の早期回収や固定資産の売却**など改善していく必要があります。

また**利益を出していく経営をしていく**ことにより改善されていくはずです。

次に「当座比率」について説明します。

当座比率は、**流動比率よりもより短期的な支払能力を見る場合の方法**です。

流動比率には在庫も含まれるとお伝えしましたが、

当座比率の場合はその在庫を除きます。

流動資産の中の「**すぐにでも現金化できるもの（当座資産）**」を使い計算します。

「当座比率」は

当座比率 = 当座資産 ÷ 流動負債 × 100%

という計算式で求めていきます。

当座比率の良いとされる比率は

一般的に100%以上とされております。

ここで「流動比率」「当座比率」で注意して見なければならない点があります。

先程の図でA社は流動資産が600でしたが

例えば、その流動資産の中に在庫が300もあるとなれば

当座比率ではあまり良い状態とは言えなくなります。

$$\text{当座比率} = (600 - 300) \div 400 \times 100\% = 75\%$$

さらに売掛金が不良債権化となっている場合があれば

正しい比率が求められなくなります。

また、「流動比率」「当座比率」が高すぎるのが良いということではありません。

「安全性」からみればよいのですが、

比率が高いということは「資金」を無駄に遊ばせているということも言えるのです。

余裕のある資金があるならば、

その資金で企業を成長させるための設備投資や、合他社にも負けられないようなサービスの研究など、**余裕資金を有効活用**することも必要かもしれませんね。